
勇者パーティー討伐物語(仮)

宮座頭数騎

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

勇者パーティー討伐物語（仮

【Nコード】

N6471G

【作者名】

宮座頭数騎

【あらすじ】

魔王は勇者を賞金首に掛け、世界中の魔物にビラを撒いた。各国、地域に生息する魔物達は、勇者を狙うために奮闘する。（考案企画のサンプルです。

森の奥深く、一体の魔物が大きな岩の上で寝そべっていた。その魔物ことウルは狼の半獣人。白い毛並みに顔付きはまだ幼げで、子供なのが分かる。

「うーん。今日も天気がいいなあ」

耳をピクピク、尻尾はフリフリ愛らしく動かし、つぶらな赤い瞳は蒼い空を眺めていた。

「おい！ ウルー！」

そんなのんびりを打ち破るかのように、遠くから叫び声がして、ウルの耳に響く。

「んん？」

体を起こして声の方に目をやると、狐の半獣人、友達のフォクスが走ってくるのが見えた。右手には一枚のビラを握っていた。

「どしたんだフォクス？」

「魔王様が凄いの出したんだよ！」

興奮気味に息を切らしながら、フォクスはビラを渡し、ウルに見るよう指差した。

内容はこう記されていた。

『倒せ勇者！ 我ら魔物の天敵！ 勇者を倒した者には、多分、賞金百万G』

「な、凄いだろ？ 賞金百万Gだぞ」

「いやいや、多分ってなんだよ多分って！」

「だから多分賞金が貰えるんだろ？」

「いや、多分じゃダメだろ？ 明らかに払う気がないだろこれ？」

「やるぞ、ウル！ 勇者滅殺だ」

「え、嫌だよ。絶対返り討ちに逢うし」

「金が欲しくないのか！ 俺達の名を売るチャンスじゃないか！」

いや、名誉はどうか判らんが、魔物が金を持っても猫に小判と同じ気がするのだが、しかし敢えてそこはつつこまなかったウルだった。こいつに言っても聞く気がないと判っているから。

「だあいじょうぶだ、策があるんだよ！」

「はあ……わかったよ」

そう頷き、打倒勇者にはしゃぐフォクスの後ろを、ウルはいやいや付いていった。

「んで、どうやって勇者を仕留めるんだよ？」

勇者が来ると言う情報をフォクスがあらかじめ掴んでいたため、二人は勇者が確実に通るとされる砂利道にいた。

だるそうな口調で訊ねるウルに、フォクスはよくぞ聞いたと言わんばかりに不敵な笑顔で頷くと、足下を指差す。

「見ろ！」

「は？ 紐と画鋏？」

「まず、先頭を歩く勇者が木と木の間に仕掛けた紐により足を引っ掛ける。それで前のめりにパタリと倒れるだろう？」

「……で？」

「するとだ。その先に仕掛けた画鋏が額にブスツと刺さり、ジ・エンドさ。ドゥーユー・アンドンダスタン？」

しばらく重い沈黙が続いたが、ウルが呆れ顔で頭を掻きながら、吐き捨てるように言った。

「アホだろお前？」

「アホって言うな！ 金がただでさえ欲しいんだ。経費削減は当然だろが！」

「削減しすぎなんだよ！ つーか、引っかかってたまるか！ 虫食

い過ぎて頭に蛆湧いてんじゃねえのかてめえ！俺でも引つかかねえぞ！」

そうウルが怒鳴りつけていると――

「しっ！」

フォクスが口元で人差し指を立てながら、いきなりウルの口を塞いだ。

「勇者が来た。隠れるぞ」

そう言っ、フォクスは草村に隠れる。ウルも慌てて身を隠し、彼の後ろから様子を眺めた。

数十秒後、勇者パーティーが見えてきた。

来たな――と、ウルは緊張の汗を頬に滴らせて勇者パーティーを見据えた。

――って、これ、見つかったら俺達死亡確定だよな？

今更修羅場に居合わせたことにウルは気づく。おかげで余計に汗が流れ出た。

隣りではまったく危機感の無いフォクスが、早く自分の仕掛けた罠に引っ掛からないかなと、勇者と交互に見ながらイキイキしていた。

こいつ、マジで引っかかると思ってたの？普通、こんなの引っ掛からないよなあ。ああ、付いてこなきゃ良かった。

もしバレたら本当にヤバいつてのに……そんな不安でいっぱいなのウルが、フォクスを恨めしく睨んでいると――

「ぐわあああつ！」

勇者が見事に罠に掛かっていた。

「うおお！引っかかったよ！うあー、マジかよー！」

「なんでお前が驚いてんの？普通俺がそのツッコミ言うところだろ。つか、勇者バカか！あんな罠に引っかかるなよオイ」

「ゆ、勇者……し、死んでいる！」

「勇者ー！」

白目を向いた勇者を、魔法使いの男が抱き起こし叫んだ。

「死んじゃうの！ 額に画鋐刺さっただけで死ぬとか、どんだけだよ勇者！」

「ふっふっふ、これで、賞金は俺のものだ」

ガッツポーズでニヤリとフォクスが笑う。如何にも魔物らしい笑みだった。

「“達”をつけるよオイ」

最初から一人締めする気かよ、などと意義を唱えているウルだが、残念ながら彼は何もしていない。

何にしても、これで目的は達成できたかに見えたが——あいにく王道ファンタジーは、勇者には甘かった。

「勇者、今あなたを蘇生します！」

「は？」

ハモらせる魔物二体。次の瞬間、僧侶が魔法を唱え、勇者はあっさり生き返った。

「元氣百倍！ 超勇者！」

サイドチェストで復活をアピールする勇者に、仲間ら喜びの拍手を送った。

「何そのどっかで聞いたようなセリフ！ というか、勇者の仲間もアホなのか！ 拍手すんなよ。対応おかしいだろ！ 普通どん引きだろうがアレ！」

何故か筋骨隆々になっている勇者と、どこかズレた仲間達にツッコミを容赦なく入れるウルだが、ちゃっかり声のボリュームは下げている。

「ふっ、ありがとう僧侶」

「いえいえ、どういたしまして」

「しまった。こんなことなら、勇者だけじゃなく、一網打尽を考えた罠を開発すべきだった」

「だから、削減しすぎだつて言っただろうに！」

遂に我慢の限界を超えたウルが、大声を発してしまった。

「ばっ！ 声がデカい！」

「ん、誰だ！」

そのせいで戦士が気付き、彼らのいる草村を鋭く睨み付けて、剣を横薙に振るう。草村が刈り取られ、ウル達の姿が露わになってしまった。

「ひい！ やべえ、バレた！」

「に、逃げろお！」

「まてえーいつ！ 魔物め、成敗してくれる！」

「ギャアアッ！ サイドチェストポーズ取りながら追い掛けてくんなあつ！」

その後、彼らが死ぬ思いで勇者パーティーの攻撃を振り切ったのは言っまでもない。

「くう、次回は必ず仕留めてやる！」

「もう、絶対嫌だああ！」

END？

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6471g/>

勇者パーティー討伐物語(仮)

2010年10月8日14時01分発行